

# 古典落語「鰻沢」の舞台を歩くツアーと関連商品・サービスの開発・販売で、「落語のまち富士川」をブランド化

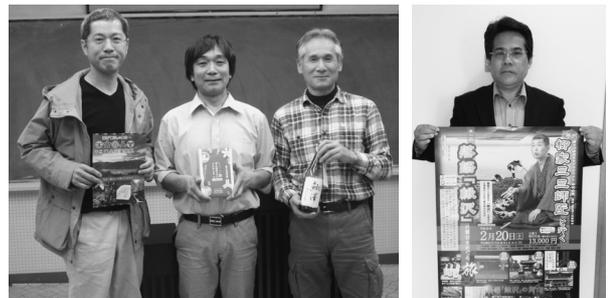
川端 伸清

独立行政法人 中小企業基盤整備機構 経営支援部 ハンズオン支援統括室

## 紹介事例の概要

会社名	有限会社竹林堂 国本屋 矢崎酒店 株式会社ツーリストジャパン
認定区分	地域資源活用事業
認定事業名	落語を核とした新たな体験型プログラムならびに関連商品の開発・販売と、「落語のまち」としての富士川町のブランド化
認定日	平成27年10月21日

販売している海野克也氏（国本屋旅館）は、10年前から地元落語会の世話人として落語事業に関わっており、ツアーのガイドマップを作成している。また、平林栄司氏（株ツーリストジャパン代表取締役）は、ツアー実施を担当している。4人は同じ地域の学校を卒業しており、商店街で商売を始めてから知り合ったという。



左から海野氏、志村氏、矢崎氏、平林氏

## ◆ 落語と関わりの深い商店街の4人が地域と一丸となって事業化

山梨県富士川町は甲府盆地の南西部に位置し、江戸時代から富士川舟運の要衝であり、物流・文化交流の拠点として栄えてきた。古典落語「鰻沢」の舞台としても知られている。

今回ご紹介するのは、「落語家と行く落語『鰻沢』の舞台をめぐる旅」ツアーと関連商品・サービスを開発して地域への観光客を増やし、「落語のまち」としての富士川町のブランド化を行う事業を、町や地域諸団体と一丸となって進めている、鰻沢商店街の落語と関わりの深い4人である。

メンバーを紹介しよう。志村光彦氏（有竹林堂専務取締役）は、落語にちなんだ菓子を開発・販売しており、ブランディングを担当している。落語に関わる日本酒を販売している矢崎正人氏（矢崎酒店代表）は4人のまとめ役であり、ツアー客の宿泊や落語にちなんだ弁当を開発・

## ◆ 事業化のきっかけ

富士川町が古典落語「鰻沢」の舞台であることから、平成14年から商店街の「元気会」（志村氏、矢崎氏、海野氏が所属する商店街若手店主の会）が中心になって、東京から人気落語家を招いて「鰻沢で落語『鰻沢』を聴く会」を年1回開催してきた。出演する落語家は、その年に鰻沢町商工会（当時）に経営指導員として着任した宮沢洋氏が「元気会」に紹介した。宮沢氏は、学生の頃からの演芸ファンであり、落語家とも親交があった。この落語会は好評を博し、現在では町に落語愛好会が発足するなど、落語は地域文化として着実に定着している。こうした取組みの結果、平成22年には「『落語「鰻沢」の舞台」が山梨県の地域資源に指定された。

しかし、平成19年には町はずれに国道のバイ

バスが開通し、商店街の通行量は減少してきた。そんなある時、4人は、宮沢氏から町を少しでも活性化するために、地域資源“『落語「鰻沢』の舞台”を活用した地域おこし事業への参画を勧められた。4人は商店街振興の大きなチャンスと立ち上がった。

平成25年10月にテストツアーを実施した後、宮沢氏から国の「地域資源活用事業」の利用を勧められた。4人は、宮沢氏とともに中小機構関東本部の澤チーフアドバイザーのアドバイスを受けながら事業計画書を策定し、平成27年10月に4者連合としては地域資源法改正後初の、地域資源活用事業計画認定を受けた。

### ◆ 町も「ふるさと名物応援宣言」を行い応援

こうした地域の動きに応じて富士川町も本事業を応援するために、平成27年8月に全国で初めて「ふるさと名物応援宣言」を行い、4年後には「富士川落語祭」を開催すると宣言した。

また平成28年1月には、地域の関連事業者や団体が広く連携してこの事業を推進するために「落語鰻沢実行委員会」が創設され、「富士川落語まちプロジェクト」を始動させた。実行委員会は、4人の他、富士川町、富士川町観光物産協会や地元商店等の関連事業者・団体、山梨県、富士川町商工会等の支援機関、地元大学等から構成され、本事業の全体コンセプトの具体化、ツアーの企画・開発等を行っている。

### ◆ 好評を博した第1回ツアー

平成28年2月に、全国の落語ファンを対象にした第1回のツアーを開催した。実行委員会は、ツアーのちらし5,000枚を作成し、メンバーが首都圏の寄席で手配りしたほか、寄席演芸専門の情報誌にツアーの開催を掲載して募集促進を図った。その結果、申込開始後定員40名の枠がすぐに埋まり、関連商品の販売やアンケート調査結果も良好でツアーは好評を博した。なお、アンケート調査では、ツアーへの参加のきっかけで最も多かったのが、寄席で配布されたツアー開催のちらしであったという。

けで最も多かったのが、寄席で配布されたツアー開催のちらしであったという。



落語関連商品（一例）とツアーののぼり

### ◆ 「落語『鰻沢』の聖地～富士川落語まち～」を伝えたい

今後の課題について、志村氏は「まだまだ本事業の課題は多い。また、4人それぞれのルーティン業務ができないほど、本事業に時間は費やされる。しかし、それは実行委員会スタッフも同様である。認定1年目はツアーの成功や、着々と進んだ落語関連商品の開発など確かな手ごたえを得た。2年日以降は、ツアーの集客方法と町のブランド化をどう進めるのかを一緒に考えていく必要がある」と語る。また、志村氏は「世の中に『落語「鰻沢」の聖地～富士川落語まち～」というものを伝えて、富士川町に訪れる観光客を増やしていきたい」と意気込みを語る。

落語を核とした新たな体験型プログラム並びに関連商品の開発・販売と「落語のまち」としての富士川町のブランド化を、地域一丸となって進めようとする4人の取組みに、これからも注目していきたい。